〈高校生の部　最優秀賞〉

届け、空に。

福井県立高志高等学校　河合　萌恵子

部屋の中に立ちこめる、墨と古い紙の澄み切ったにおい。筆と紙が触れ合う、心地よい音。そして、静寂に包まれた空間の中で一人、黙々と筆を動かす祖父の背中。私はその全てが大好きだった。

私の祖父は書道家である。私自身、祖父から習字を習っていたこともあって、祖父は私にとって、優しいおじいちゃんでもあり、尊敬している先生でもあるのだ。世の中では後期高齢者と呼ばれる年齢ではあるが、個展のための創作に取り組み、自力で車を運転して会合に書道教室にと、活動的な毎日だった。

その元気な姿からは、想像すらつかなかった。まさかこんなにも突然に別れがやってくることになるとは――。

祖父が倒れたのは、今年の八月の始め。日差しがじりじりと照りつける真夏日だった。私はその日も、間近に迫った合唱のコンクールに向けて、部活のメンバーとともに、課題曲の練習をしていた。コンクールまであと一週間ということもあって、みんな自然と練習にも熱が入っていた。

そんなとき、私の携帯に母から一通のメールが入った。

「至急。おじいちゃん倒れました。大至急携帯に連絡。」

私は焦った。パニックに近い状態だった。信じられないまま、震える手で母に電話をかけた。そのまま病院へ向かうと、親戚が集まっていた。その日から祖父の昏睡状態は続いた。その後、いつ連絡が来るかという不安な気持ちと携帯を抱いたまま、二日、三日と時間だけが過ぎていった。

それでも、部活動を休むわけにはいかなかった。コンクールまでに残された時間は刻々と減り、部内のぴりぴりとした緊張感も高まっていた。私は携帯に入る緊急の着信に気をとられつつも、みんなと、うたった。もしかしたら、あのとき合唱は精神的な安定剤になっていたかもしれない。個人的な事情だけで、一緒に歌を創るみんなに迷惑はかけられない、共に練習してきたみんなとコンクールに出たい。そんな思いが私の不安を軽減してくれていたように思う。

あっという間に時間は過ぎ、とうとうコンクール当日となった。午後の本番に備えて、朝から練習が始まった音楽室には、張りつめた緊張感が漂っていた。最終確認を兼ねた部分練習が続いた。そのときだった。私の携帯の着信音が鳴り響いたのは――。母からだった。祖父の容態が急変したので、一度病院へおいで、とのこと。遂に時は来てしまったのだ、と思った。私は急いで音楽室を出て、病院へと向かった。

私が病院に着いてからしばらくのこと、祖父は、息を引き取った。大好きな祖父の死を受け入れられず、やるせない感情に駆られた私は、午後に控えるコンクールに出ようと思う気持ちすら失っていた。そんな私を変えたのは、母の一言だった。

「歌っておいで、きっと空にも届くよ。」

ただ純粋に、その言葉を信じたかった。私は、ベストを尽くすと心に誓って病院を後にした。
そして、コンクール本番。何度も立ったことのあるステージだが、あの日はそこから見える光景が今までとは違って見えた。曲が始まるまでの数十秒の間、これまで自分がしてきた経験が、スライドショーのように目まぐるしく脳内を駆け巡った。部活の人たちと長い時間を過ごしてきたこと、家族四人で夕食を食べたこと、書と向き合う祖父の背中を見るのが好きだったこと――。そのひとつひとつが、儚いけれど、とても尊くて、愛しいものに思えた。
そんなことを考えているうちに、聴き慣れたピアノの伴奏が流れ始めた。音楽が、幾度となく練習した歌い出しに差しかかると、ほとんど無意識であるかのように、自然に口が動き、声が出る。悲しみや寂しさなんか消え、歌のことしか考えていなかった。もうその後は、歌いきるだけだった。歌い終えてステージを降りると、不意に涙が溢れた。ずっとこらえてきた、言葉では言い表せない様々な感情が、一気にこみ上げてきたのだと思う。
結果は銀賞。目標としてきた金賞には届かず、中部大会への出場を果たすことはできなかった。このコンクールのために、ひと夏を捧げてきただけあって、やはり悔しかった。それでも私にとっては、歌を通じて祖父に想いを届けられただろう、という望みに近いような達成感のほうが、悔しさよりはるかに大きかった。
合唱部に入って四年目になるが、こんなにも歌のもつ力を痛感したのは、この夏が初めてのことだった。この歌、きっと祖父にも届いているかな。そんなことを思いながら、私は今日も、歌っている。